

論文構成

【序論】

1章 本研究について

- 1-1 はじめに
- 1-2 研究目的・方法
- 1-3 既往研究
- 1-4 本研究の基礎事項

【本論】

2章 社会構造の変化にともなうムラの歴史の変遷

- 2-1 はじめに
- 2-2 所有論から見る村落共同体の歴史の変遷
- 2-3 機能論からみる村落共同体の歴史の変遷
- 2-4 同族的ムラと機能的組織の対応

3章 群馬県千年村の地質的特質

- 3-1 はじめに
- 3-2 群馬県の地形・地質
- 3-3 群馬県における千年村が立地する地質傾向

4章 群馬県利根川流域の千年村の持続形態

- 4-1 はじめに
- 4-2 対象地の選定
- 4-3 利根郡呉桃郷／利根郡みなかみ町下津小川島
- 4-4 碓氷郡坂本郷／安中市松井田町五料
- 4-5 多胡郡辛科郷／高崎市吉井町神保
- 4-6 多胡郡山字郷／高崎市山名町
- 4-7 那波郡葦束郷／伊勢崎市葦塚町

5章 地質基盤と社会構造の変遷からみる千年村の持続形態

- 5-1 はじめに
- 5-2 ムラの地域経営の歴史の変遷から各村の持続形態の特質を見る
- 5-3 地質基盤と社会構造の変遷からみる千年村の持続形態

6章 結論

【序論】

1-2 研究目的

本研究では、平安期文献『和名類聚抄』¹記載地名の現在地比定が可能であった地域を〈千年村〉として定義する。古代社会が現在へと影響をあたえていることは庄子²が述べているが、あくまで圏域での視点にとどまっている。本研究では、地質基盤やムラの歴史の変遷を踏まえた上で、一つの流域に着目し、土地の成立や千年村の立地における巨視的分析、村落の構成原理などの微視的な分析を通して、千年村がいかにして千年持続するに至ったか、その一端を把握することを目的とする。

1-3 研究方法

まず、千年村を見る背景としての社会構造について、「ムラ」を主眼においた二つの村落共同体論の分析を行う。そのうえで、古代から現代にかけて「ムラ」が社会構造の変遷によっていかに移り変わってきたか考察する（2章）。次に、質学・地球科学の既往成果から関東平野および群馬県の成因をまとめ、関東の地質基盤を確認する。その後、群馬県における千年村の地質基盤との関連性について巨視的に分析する（3章）。その上で、その中から5村対象地を設定し、各村の持続形態について分析・考察する（4章）。最後に、2～4章を包括的に分析し、群馬県利根川流域における千年村の持続形態の特質について考察する（5章）。

【本論】

2章 社会構造の変化にともなうムラの歴史の変遷

・木村礎「日本の共同体」（1972）
木村礎は、地方史、村落史を専門として、村落景観に対する歴史的考証を発展させた歴史学者である。博士学位を取得した「日本の共同体」では、村落共同体という実態を掘むために、「土地の所有」に着目し、その変遷過程を通史的にまとめた。主に、勤労農民をとりまく階級（縦のつながり）に着目している。木村は、自身の共同体論を「所有論的共同体論」としている。

・中村吉治「日本の村落共同体」（1971）

中村吉治は、村落共同体についての歴史の変遷を大きく発展させた人物であろう。家と家、家と村落など、主に横のつながりや身分的な縦のつながりなどさまざまな機能的なつながりに着目し、その内実を生き生きと描いている。いわゆる「機能論的共同体論」である。

¹ わみょうるいじゆしやう。930年代に成立した漢和辞書。
² 庄子肇佑「現代日本に於ける古代社会の影響に関する理論的研究—古代地名の現在地比定の分析を元に—」（早稲田大学, 2013）

本章では、この二つの研究成果をもとに、社会構造の変化に伴うムラの歴史の変遷について考察した。

まずは、各論においてその村落共同体の歴史の変遷を模式図として表現した。そのダイアグラムをもとに、村落共同体を見る上での二つのキーワードを設定した。同一の景観を保持しているまとまり（集団）が同族意識をもっている状態を「ムラ」とし、それが次に述べる機能的組織に優勢している状態を「同族的ムラ」とする。そうした同族意識や景観的同調をこえて機能的な結合をおこなっていく「機能的組織」である。同族的ムラとして発生したムラが、機能的組織へと展開していく過程を考察した。その両者の歴史的展開を[図3]の下部に示す。

3章 利根川上流域における千年村の立地特性

3章では、地質学に関する既往の成果から、関東平野の成員、群馬における多様な地形の成立をまとめた。その上で、「20万分の1 シームレス地質図」を用いて、群馬県の千年村がどのような地質を内包しているか、そして、「第5回 自然環境保全基礎調査 植生調査結果」を用いて、その地質に対する土地利用を分析し、考察した。その結果を以下に示す。

- ・一般的な傾向として、群馬県の千年村の地質は〈沖積低地＋自然堤防 or 低位更新世段丘＋更新世の火山岩類〉で成立する。とくに、それぞれ水田、居住地・その他耕作地、居住地・森林・植林という明快な土地利用の差が見てとれる。
- ・居住地と水田以外の耕作地の多くは同一地質上に存在し、森林・植林は新第三紀以前の地質上にある。
- ・沖積低地＋自然堤防のみのセットの千年村は、ほとんど存在せず、いわゆる氾濫低地での千年村立地が起こり得ないとした。
- ・特殊事例として沖積低地の存在しない鱈川流域の千年村は、更新世の低位段丘という同一地質上に、上位・下位の二つの段丘が存在し、その地形に合わせた土地利用がなされていることを発見した。

3章 群馬県利根川流域の千年村の持続形態

本章では、千年村と地質との関係から、大きく地形区分をわけ、以下の5村を対象として、詳細な分析を行った。

① 山地1 利根郡呉桃郷／みなかみ町月夜野下津小川島

段丘崖と河川に挟まれた小川島は、段丘崖からの土砂災害や、河川からの洪水など災害とともに生きてきたことがわかった。その中で、集落や敷地の配置は、できるだけ災害を避ける位置に立地し、土壌に合わせた生産を行ってきていた。また、交代制役員制度によって、ムラの運営や年中行事が継承され、ムラ単位から家単位までさまざまな同族的まとまりが複合的に絡まり小川島としての一体感が作られていく。そ

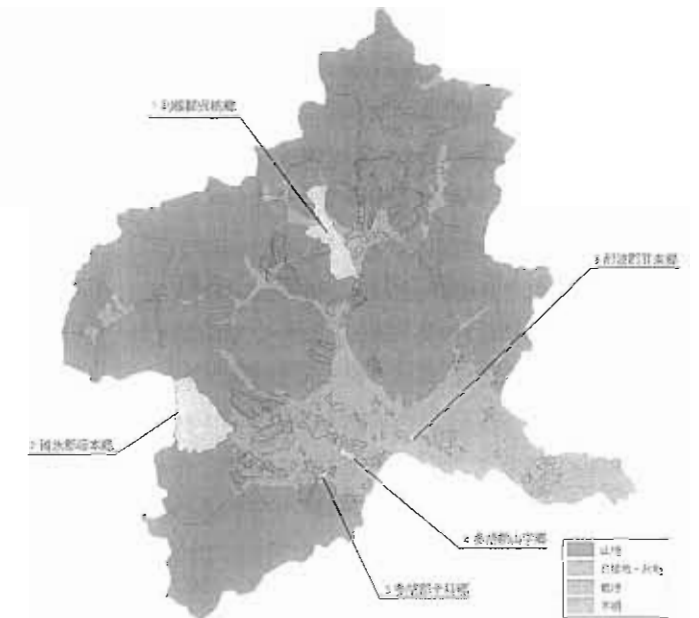


図1 地形区分と千年村（筆者作成）
こうしたまとまりから水害を象徴する祭りであるヤッサ祭りは継承されてきた、ムラの団結とともに災害意識の共有がなされていることがわかった。自然災害と共に生き続けてきた小川島だからこそ生まれる同族的団結をなす地域経営がムラの持続を支えていることを見出した。

② 山地2 碓氷郡坂本郷／安中市松井田町五料
五料全体の特徴としては、山地の環境に対応して沢水や地下資源、森林資源の有効活用が見られる地域（山際の集落、ふもとの集落）と主に街道を介して宿場・商業を行う中山道沿いの地域（街道沿いの集落）が、一つの大字内に併存している点が特徴的である。しかし、それぞれ独自のくらしの形は持っているが、時代ごとに街道沿いの集落に存在した施設を中心に五料としてのつながりを持っていることがわかった。言うなれば、分散居住・集約統制のムラである。

③ 台地 多胡郡辛科郷／高崎市吉井町神保
神保は、大きく上位段丘にある上神保、下位段丘上にあるした神保にわかれている。

上神保は、上位段丘面に広大な生産地を有している。地形を読み込んだ数軒一セットの居住形態は、上神保での多くの生産地が伝統的形態を保持したままにした。

対して、下位段丘面にある下神保は、古くからの集落形態を残す部分もありながら、環境特性に合わせた選択的開発が行われてきた。そのような開発によって勤め人が増加する時代に居住地として望まれ、特に神保団地の存在はムラの人口維持および生存に大きく貢献した。

このような、上神保における「生産性に優れた農地」、下神保における「アクセス性に優れた居住地」という性格は、互いに補い合い、近代的变化に対応して神保を持続させてきた。このような上・下の関係を担保する存在が、辛科神社の

「みそぎ流神事」である。みそぎ流しルートは、普段は主要な農道としてあり、ときには祭事に使われる道になるという二面性を持つ。二つの地形が互いに補い合いながら一つの道によってつながり続けるという相補的携帯を持つ上下村であることが持続的形態としてあることがわかった。

④ 台地・低地 多胡郡山字郷／高崎市山名町

山名町は、周辺の阿久津町、木部町、根古屋町（千年村）と共同し、南八幡地区というまとまり意識を持っている。この共同意識の背景には、山ノ上から展開したという無自覚の血縁意識などがあつたのではないかと考えられる。千年村同士（千年村から派生した地区含む）の密接な交流による新たな集団の誕生、そして外部の千年村やその他のムラとの積極的交流が郷域を超えた拡大されたムラとしての意識を保ち続けている。

こうした内的結合と外的交流の大きな要因に当たるのが、烏川と鑓川の存在とその結節点という立地である。二つの川に挟まれた舌状台地のように丘陵が残され、そこに人が入っていった。そして、川がもたらす肥沃で多様な土壌と、自然堤防によって、集落の展開がなされていく。このとき、川が結節点となって閉じていることによって、外部への拡大が抑えられ、「内側」としての結合が強くなったのであろう。

こうして安定的に形作られた南八幡としての共同意識とその始源としての山ノ上が持続的形態をつくりあげている。それは、内部的拡大・外部交流型のムラであった。

⑤ 低地 那波郡葦束郷／伊勢崎市葦塚町

まず、葦塚の立地は、低地の氾濫原上にあり、水害を受けやすい立地である。しかし、弥生時代から集落が形成されるのは自然堤防上の比較的地盤が安定し、周辺より高く、災害を受けにくい位置に立地していた。その中でも、旧集落全体を通して共通する集落構造が見られ、住宅の更新が進みつつもかつての農村景観を残している。そうした集落立地を持ちながら、土壌に合わせた生産が行われており、地形と地質を読み解く能力が見られる。

近代になり、都市的開発を区画整理事業と言うかたちで受け入れ、県道 24 号線は大字を東西に分断してしまった。旧集落とは関係のない文脈で発生する新興住宅と、そことの関係を分断する県道 24 号線という問題に対して、「つきあい行政区」という新たな行政区画・町内会を、住民主体で新しく設定し、元来の地域経営を守り、かつ新規住民を受け入れる動きが見られた。あえて行政区画を縮小させることで、安定した自治を行える範囲でまとまり意識を持つことができるようになった。

5章 地質基盤と社会構造の変遷からみる千年村の持続形態

以上見てきたことを包括的に考察する。まず、2章において見た、同族的ムラと機能組織の関係を、各時代のムラにおける同族意識の展開から見る。

●古代前期・・・大きな同族集団（大氏族）の中で、自らの集団に対して同族意識を持つ。景観と経営単位が不分割の強固な同族的ムラである。

●古代後期・・・郷戸もしくは郷単位で同族意識をもち、地域的なまとまりと、同族意識の一致する同族的ムラである。

●中世・・・全体として、同族としてのムラの意識はあるものの、勤労農民による形式的な土地所有とともに、その土地に勤労農民が固定され、同族意識が薄れ始める。

●近世・・・本家分家展開や、機能的な結合を見せる「組」などの「家と家とどうしの同族意識」が優勢し、地域を超えた機能的組織の結合を始める。そうする中で、地域的な集団としての意識が薄れていく。近い集団でくられる行政「村」が誕生する。

●近代・・・機能的結合もうすれていき、行政「村」を基礎とした場所のまとまりとしてのあらたな自治集団が誕生する。

千年村の持続要因には、内部的なまとまり意識の強さが見られた。このまとまり意識は、各時代的な性格を持つことがわかった。

- 古代前期・・・みなかみ町下津小川島
- 古代後期・・・松井田町五料
- 中世・・・吉井町神保
- 近世・・・高崎市山名町
- 近現代～・・・伊勢崎市葦塚町

これは、それぞれの時代に持続形態が確立した、というわけではなく、千年村の地質基盤をもとにする自然的立地と時代ごとのムラの性格が合致した時、安定的な持続的な形態をえるのである。

その大きな要因を以下に挙げる。

- ・ムラの閉鎖度⇔拡大の限界性
- ・解像度の高い微地形⇔生産単位としての安定

これらは、地形地質と大きく関連することは言うまでもない。自然基盤の上に立地する千年村が、社会構造の変化におけるムラの移り変わりの中で、それに合わせた安定的なムラの性格を帯びる時、千年村が千年村たりえるのである。

参考文献

- 地質学・地球科学に関する文献 平朝彦『日本列島の誕生』（岩波新書、1990）、野村哲編著『日曜の地学5 群馬の地質をめぐって 改訂版』（築地書館、1987）、貝塚爽平、成瀬洋、太田陽子『シリーズ日本の自然4 日本の平野と海岸』（岩波書店、1985）、貝塚爽平、銀西清高『シリーズ日本の自然2 日本の山』（岩波書店、1986）、坂口豊、高橋裕、大森博雄『シリーズ日本の自然3 日本の川』（岩波書店、1986）
- 大地とくらしに関する文献 中谷凡仁『動く大地、住まいのかたち—プレート境界を旅する—』（岩波書店、2017）
- 村落空間に関する文献 斎木 崇人、『集落空間の構成原理と地形立地』（農村計画学会、1986）
- 利根川に関する文献 国土開発技術研究センター、『利根川百年史：治水と利水』（建設省関東地方建設局、1987）
- 各種利根川と千年村候補に関する文献 など

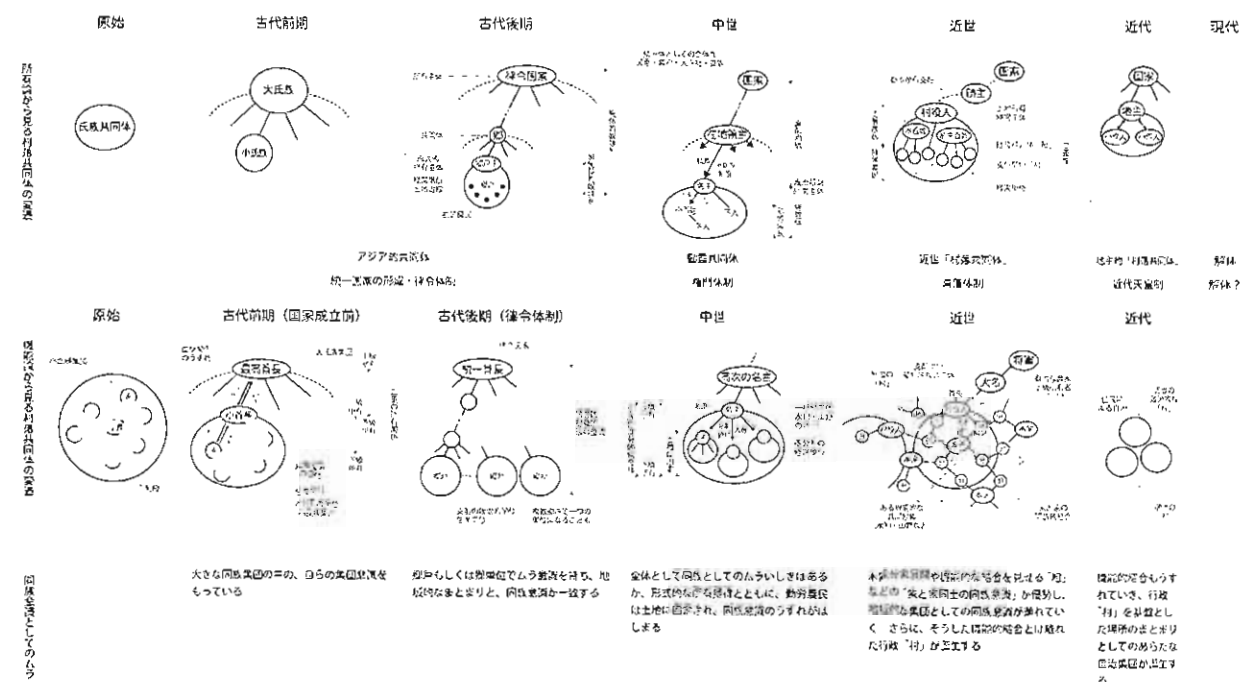


図2 各村落共同体論のまとめと、ムラの意識の変遷（筆者作成）

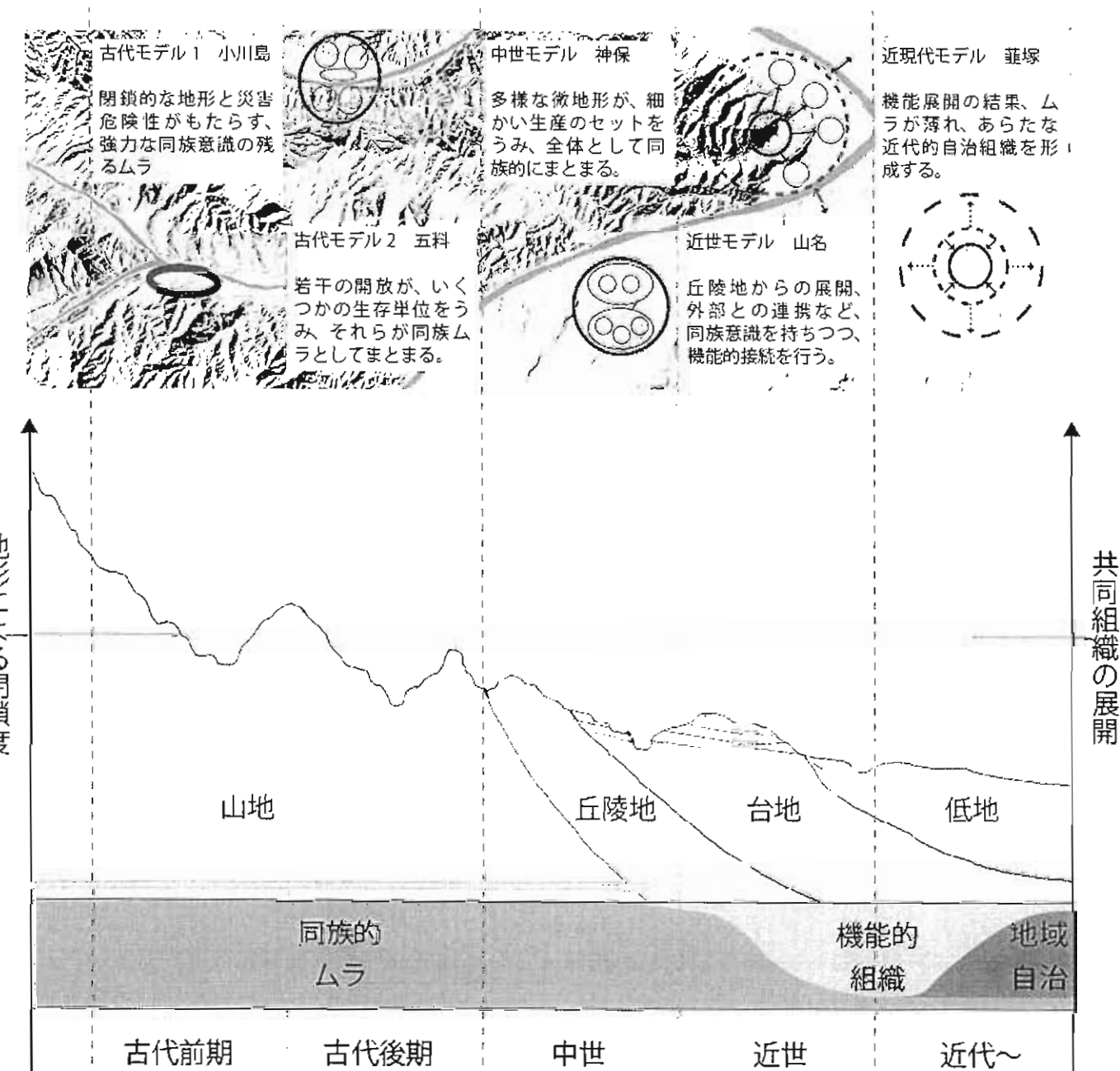


図3 地質基盤と社会構造の変遷からみる千年村の持続形態の関係（筆者作成）